

## スポーツのグローバリズム

高橋義雄\*

Globalism in Sports

Yosio TAKAHASHI

【司会】 本日は、名古屋大学の高橋義雄先生より、「スポーツのグローバリズム」というテーマでお話をうかがいます。高橋先生は非常に若くして世に出られました。大学院学生の頃に『サッカーの社会学』を書かれて、すでに一家を為したと言ってもいいと思います。現在はJリーグのサッカーとか、かつては野球の監督などでスポーツの現場と関係されています。そして、現在は学問的に立ち向かっていこうということで、精力的に活躍しておられます。日本スポーツ産業学会などでも裏方を務められたり、非常に重要な仕事をしておられ、今後ますますご活躍が期待されています。本日は、その高橋先生からお話を聴く機会を得られ、非常に嬉しく思います。

本来ですと、田中研究科長がご挨拶を申し上げるべきところですが、本日は大学の会議のため欠席いたしております。

それでは、高橋先生、よろしくお願いいたします。

【高橋】 名古屋大学の高橋でございます。お

招きいただきまして、ありがとうございます。本日はスライドも OHP も持ってまいりませんでした。ディスカッションのなかで話を深めていきたいと思います。私も座らせていただいております。

いま木村先生からご紹介いただきましたが、まず自己紹介をした方がいいかと思っておりますので、「はじめに」ということで自己紹介をさせていただきます。

### 1. はじめに（自己紹介をかねて）

私は昭和 43 年（1968 年）に東京で生まれました。当時は東京といっても野原があり、野原で遊んだりドロンコ遊びをする、そんな時代に生まれました。育ったのも東京で、小学校 3 年から少年野球に入り、最初はピッチャーをやっていました。当時はまだ受験戦争もそれほど大変ではなくて、野球を続けながら受験勉強をして、私立中学に入りました。男子校で中・高一貫の学校でした。野球は、高校 2 年の秋の大会

---

\*名古屋大学助手

まで続けました。本当は3年になっても続けたかったのですが、大学受験のために夏の大会後は引退するのが学校の慣習だったため、高校2年で止めました。

そして大学に進みました。大学でも野球をやると思っていました。僕の同期には、ロッテに入った小林至君がいます。あの頃の東大は、確か70数連敗しており一度も勝てない時代でした。僕の同期の連中は、たぶん一度も勝てずに卒業しているはずです。僕も入部しようと思っていましたが、入学時の身体検査で「過度な運動はしないように。腎臓の調子が良くない」と言われてしまいました。それで、結局大学に入ってから野球をせずに、自分の体のためになる運動をしようと思い、大学4年間は合気道をしていました。4年もやると大体初段がとれるのですが、僕も初段をとりました。それで、当時、野球をやらずにブラブラしていたので、高校の方から目をつけられ、「高校の野球のコーチをやらないか」という話が舞い込んできて、大学2年の時からコーチを始めました。最初はどうなことをやったらいいのかわからず、スポーツ科学とかトレーニング関係の本を読んだわけですが、トレーニングの勉強をしたくて大学3年から教育学部体育学・スポーツ科学科へ進学しました。にもかかわらず、いま僕が社会学をやっているのは、実はスポーツが好きで、トレーニングのこととかスポーツのことをもっと知りたくて社会学も始めた、というのが発端なのです。

そして大学3年、4年と過ぎ、卒業し、大学院へ進みました。当時はバブルの時代で、どの会社にも就職できる時代でした。就職活動で銀行なんかへ行くと、鮎とか天ぶらを食べさせられて、家へ帰れないほど拘束される時代でした。僕も一時は会社へ就職しようかと思い、広告代理店の電通と、「スポーツ・グラフィック Number」というスポーツ雑誌を出している文芸春秋社を受けました。文春の方は今から思えば「運良く落とされた」わけです。1600人ほどが受けに来て、結局受かりませんでした。スポーツの文章を書きたいと思っていたのです

が、それができなくなったわけです。というわけで、大学院へは次の選択肢として進学したのです。

東大の大学院に進んだわけですが、当時は人文社会科学系のことを直接教えてくださる先生がおられませんでした。大学時代も非常勤で、横浜国立大学の海老原先生とか早稲田大学の寒川先生とかが授業に来られていましたが、大学院の方へはいらっしゃらないということでしたので、自分勝手に手当たり次第に本を読んだ、というのが僕の実状です。ですから、社会学がわかっている人だと思われると非常に困ってしまい、非常に運に左右された人生を送ってきましたので、そのへんを差し引いて僕の話をお願いいただければ、と思います。

それで、サッカーとの出会いはこんなふうでした。大学院に入った当時、浅見俊雄さんという現在日本体育大学にいらっしゃる先生が東京大学で教えておられました。また、浅見先生は日本サッカー協会の理事をしておられました。そして、当時Jリーグは発足する前後で、企業や官庁はサッカーについて調べたい、データが欲しいという状況でした。それで、浅見先生のところに皆が「こんなデータはないか」とたずねて来られたのですが、浅見先生もわからない。「では調べてデータをとっておこう」という話から始まり、東大の身近なところでデータを集めようということになったわけです。それで、そういう仕事をいとわない学生はいないかということで、僕に話がありました。僕自身はサッカーのプレーをしたことはありませんでしたが、浅見先生に促されながら、サッカーに関するいろいろなデータを集めて貯めていった。それが、僕がサッカーを始めたきっかけです。ですから、サッカーのプレーについて聞かれても、僕自身「ボールは相手のいない側の足で止める」といったことをやっと覚えたぐらいで、あまり難しいこともできませんし、そのへんの話はちょっと勘弁してほしい感じです。

資料もいろいろと集まり、Jリーグも始まりました。そして、これも偶然なのですが、寒川先生経由で月刊 Asahi 編集部から「そういう

資料を基に、アントラーズに関して文化人類学的な調査ができないか」という話が起きました。それをやらなかったら、いまの僕はありません。その時にその仕事をやったおかげで、その雑誌を読んでくれた NHK 出版の編集者が「これを本にまとめませんか」と言ってくださいました。それで書いた本が『サッカーの社会学』です。社会学者の方からすれば「ただ単にデータを集めただけ」と言われることもありますが、修士の頃に書いた文章としてはあの程度だろうな、といま読み直すとそう思います。

そして、博士課程に入りました。修士の時も博士の時も先生はいませんでしたから、僕はいろいろなところに出入りさせていただきました。日体大へ行ったり、図書館へ行ったり、あとは勉強会みたいなかたちでサッカーの研究会とか、また筑波大学の先生のところにお世話になったりして、フットワークよくフラフラとやっていたのが現実です。それで、大学院の博士課程に入ってから、生活費をいかに捻出するかという問題にブチ当たりました。その頃というのは、2002 年のサッカー・ワールドカップ（韓国と日本での開催が決定）の招致活動を立ち上げたところで、2002 年ワールドカップ招致委員会事務局ではいろいろなデータを集めて、国際サッカー連盟に提出する資料をつくる時でした。その事務局から「やらないか」と声を掛けていただきました。それ以降 3 年間、サッカー協会事務局に非常勤職員として、現場で仕事をする機会を得ました。そんなこともあったおかげで、サッカーの現場の話というか、裏側も知ることができました。それらをいかに社会学的に切り刻むかということですが、それがいま一つできない状況にあります。

それで、本日お配りした資料をご覧くださいと、「何を言ってるの、この人は」という感想を持たれるかもしれません。今までの考え方とは少し違う話をすることになるかもしれませんが、ディスカッションのなかでいろいろと質問をしていただければいいな、と思います。特に、最後に付けた資料は「カオスとは何か」という日経サイエンスから取った資料ですが、カオス

とか複雑系という考え方が 1995 年あたりから流行り、ちょうど僕が大学院にいた頃には研究室でも流行っていました。こういったことを研究している運動生理学の山本義春先生がカナダから帰国されて東大で教えておられた影響で、僕も少し感化されました。自然科学の考え方が、アナロジーとして社会科学にも当てはめられるのではないかということで、考えるきっかけを与えられました。そんなことも含め、ちょっと聞いたこともないような話をしていると言われるかもしれませんが、本日はお話をしたいと思っています。

## 2. スポーツ社会学，2つの立場

自己紹介が少し長くなりましたが、次に、スポーツ社会学の 2 つの立場ということでお話しします。僕は、スポーツ社会学と名乗って仕事をさせていただいているわけですが、「スポーツ社会学とはいったい何か」ということです。ある本によれば、「スポーツ現象に貢献するスポーツ科学の一つの分野が、スポーツ社会学だ」ということです。また社会を理解するためにスポーツ現象を観察するのがスポーツ社会学だということ。しかし僕としては、スポーツという現象自体が最初からあるものではない、つまり、人と人が集まってスポーツをするということ自体がすでに最初からあるものとしては考えていません。そこで、「スポーツと言われる現象がある」ということに注目して、それが社会のなかでどんな役割をし、どんなことに影響されてこういう現象が起きているのかという考え方でもって研究しています。「スポーツに貢献するのがスポーツ科学で、その社会学を使ってスポーツに貢献するのがスポーツ社会学だ」という立場は、僕の立場とは違うのです。そのへんを前提としてお聴きいただきたいと思っています。

### 3. 私的スポーツ概念

次に、これもたぶんディスカッションになると思いますが、私のスポーツ概念について、少しお話しします。

スポーツというのは、それを行う人、場所、時間によっては、まったく別の活動になり得るということです。集まってくる人々というのは、様々な価値を持っているし、様々な行動に意味や目的を持って集まります。スポーツにどんな目的があるのか、何の価値があるのか、何の意味があるのか。それらにはいろいろな色がありすぎて、いろいろと反射するおかげで白色になるんだろうな、と僕は思います。あるスペクトルが強い時に、例えば赤色のスポーツは赤のためにやっている、青のためにやっている、黄色のためにやっている、となるだけで、そういう意味では、スポーツという現象は普遍的なものではないと思っています。そういった人々が、ある時間、ある空間においてネットワークをつくって動き回るわけです。動き回って、その動き方というのは創発的なものであるということです。創発というのは、お互いに影響し合って常に形を変えていっているもの、と考えています。ですから、例えば自分がスポーツに参加している場合、参加している他の人と影響を与え合っているのです。常にちょっと前のスポーツといまのスポーツとは違っているかもしれないし、場所が変わればまた違うかもしれない。そういったかたちで、常に移り変わるもの、状態が常に変わるもの、と考えていただけたら、僕の考えに近いと思います。

それで、スポーツというものは、集まっている人、集まっている場所は一定ですが、そこから外の環境と常に影響を与え合っています。ですから、組織のレベルによって全然違うということです。例えば、生物学的に言うと、肝臓の細胞の動きと、細胞が集まって肝臓になった時の動きは全然違うわけです。つまり、機能とか目的が違ってくるといような意味で、組織のレベルによってスポーツの意味とか目的とか機能が全然変わってくる、と考えます。スポーツ

とはそんなような人間の活動なのですが、「人間の認知レベルで予測不可能性という信じられる前提のもと、その予測不可能な結果を求める活動」なのです。例えば、勝ち負けがわからない。要するに、結果がどうなるかわからない状態でスポーツという、ある一種の行動をとるわけです。それはお互いに信じているだけなのかもしれません。例えば、接待ゴルフでは、接待されている方は、勝つか負けるかわからずにプレーしていると思う。しかし、接待している方は、勝つ気はないわけです。最初からパットを外したりして、相手を接待するために、負けることを前提にしてゴルフをしている。しかし、接待されている側は、予測不可能な状態でゴルフをしている。そういった予測不可能な状況をつくって、お互いに結果を競い合うのがスポーツだろうと思う。大人と子供がゲームをして、大人が勝つに決まっていると思ったら、ゲームは成り立たないわけです。ハンディを与えたりすることによって予測不可能性を高める。つまり、予測できる状況でスポーツをしないのが、スポーツの最低限の前提かと考えています。そういった状況は、各時代、社会、文化背景においてあると思います。「当時の社会や文化的背景、ある目的からスポーツと定義された活動」、がスポーツだと思います。だから、10年前のスポーツと現在のスポーツはおそらく違います。その時々「スポーツとはこういうものだ」と決めたものがスポーツだ、と思います。だから、いま僕が話しているスポーツと10年後に話すスポーツは違って来るかもしれません。科学技術が発達すれば、バーチャル・リアリティのなかで体を動かすのがスポーツだと言うかもしれません。

逆に、認知のレベルで予測が可能であるもの、例えばエアロビック・ダンスですが、これはたぶん健康になると予測しながら行われているものです。まあ不健康になることもあるかもしれませんが、いずれにせよ、これは単なる目的のある運動なんだろうと思います。それで、エアロビック・ダンスはみんな健康になるとわかっていてやっていると思いますが、突然死んだり

する可能性もあれば、これはおそらく生死をかけたスポーツということになると思います。なぜなら、スポーツというのは予測不可能性から成り立っているからです。エアロビック・ダンス中の突然死が半数以上あれば、みんな恐怖に怯えながら、だけどやるわけです。そんな状況になれば、エアロビクスもスポーツです。このへんはディスカッションしたいと思いますが、こんなふうに考えています。

それで、「スポーツという現象のもつ性質」ということですが、ある人が定義した今のスポーツの現象を見てみると、基本的には、言語化されない身体による情報がスポーツのなかで行き来し合っているわけです。お互いの息づかいがわかったり、駆け引きをする。要するに、サッカーならば相手の股をボールで抜くとか、相手がフェイントをかけてきた時のだまし合いの瞬間。そういうふうにお互いに情報を交換し合い、かつそれがルールによって守られることで、お互いに共通して認識できるものなのです。つまり、お互いが納得できる身体活動のシステムなんだろう、そういうのがスポーツの性質であって、それ故にお互いの行動がわかるというのは、実はきわめて価値の高い情報をつくれることだと思うわけです。スポーツは非常に多くの情報を生み出し得るし、その情報を理解できる人間は非常に多い。特にサッカーなんかは、アルゼンチンへ行ってもブラジルへ行っても、サッカーをプレーすることにおいては一種の共有できる感覚がある。逆に言うと、日本の相撲となると、ぶつかって転がすことは理解できるかもしれませんが、ふんどし姿で出てきた段階で「いったい、これは何？」と外国の人は思うかもしれない。だから、サッカーとか相撲とかバスケットボールとか野球を、スポーツという一つのものとしてまとめるのではなく、個々の身体活動と考えると、非常に情報の共有度の高い活動と、非常にローカルのものがあるわけです。本日のテーマのグローバルとはまったく逆の、ある一部の人にしか通じない活動があるわけです。そうした点からみると、サッカーは非常にグローバル化が進んでいる身体運動文化

だと言えます。

#### 4. グローバル化とは

それで、グローバルとして話が進んだ時に、「グローバル化とはいったい何か」ということです。アンソニー・ギデンズは彼の著書である『近代とはいかなる時代か？』のなかで、グローバル化について定義していますので、そこを少し読んでみます。「社会学者は、従来とってきた“社会”という概念に対する過度の依存に代わって—この場合、社会とは、境界の定まったシステムを意味している—、これはおそらく日本の社会であれば、日本が境界になるわけですね。「社会生活がどのように時間と空間を超えて秩序づけられているのか—時空間の拡大の問題—の分析に、まず専念していくべきなのである。時空間の拡大化という概念的枠組みは、《局所的なかわり合い》（ともにその場に居合わせている状態）と、—これがローカルな身近な状態ですね。—《距離を超える相互行為》（目の前にあるものとそうでないものとの結びつき）—例えば現在僕がこの会議室で講義しているのは局所的な関わり合いだと思いますが、衛星放送によって僕の講演を日本中で聴くとなると、距離を超えた相互行為があり得るわけですね—との複雑な関係に注意を向けている。近代においては、時空間の拡大化の度合いは、それ以前のいずれの時代と比べても激しくなっており、したがって、特定地域の社会形態や出来事と、遠隔の地域の社会形態や出来事との相互の結びつきは、それに応じて“拡張”していくようになる—つまり、昔は人に会うのであれば、歩いて会いに行くしかないわけです。人間が一日に歩けるのは約50キロぐらいとすれば、その範囲内の人にしか会えないわけです。ただ、人力車とか自動車とか飛行機と交通機関が発達してきたので、ここで講演している時間内にソウルへ行けてしまう、そんな時代になってきました。そういったことも影響し、どんどん相互の結びつきの範囲が広がっていくわけです。—グローバル化とは、さまざまな社会的状況や地

域間の結びつきの様式が、地球全体に網の目状に張りめぐらされるほどに拡張していく過程を基本的に指しているのである。したがって、グローバル化は、ある場所で生ずる事象が、はるか遠く離れたところで生じた事件によって方向づけられたり、逆に、ある場所で生じた事件が、はるか遠く離れたところで生ずる事象を方向づけていくというかたちで、遠く隔たった地域を相互に結びつけていく、そうした世界規模の社会関係が強まっていくことと定義づけできる」と書いてあります。例えば、衛星放送でこの会議が世界中の人に見れるとなると、僕の意見に共鳴したアルゼンチン人が運動を起こす、そんなことがあり得る時代になってきたのです。それを自然科学的に言うと、「バタフライ効果」というのがあります。カオスのなかで言われていることですが、「解の将来の振る舞いが初期条件に敏感に依存することで、この効果があることがカオスの重要な性質である。“ブラジルで蝶が羽ばたくとテキサスで竜巻が起きる”というたとえから、この名がある(竜巻がハリケーンになったり、地名もシカゴや北京になったりと、さまざまなバリエーションがある)。気象学者でストレンジ・アトラクターを発見したローレンツ (Edward N. Lorenz) の提唱とされているが、正確な経緯は不明」。という感じで、実は自然科学のなかでも、あるちょっとしたことが大きな影響を与えていることがだんだんわかり始めている。例えば、明日の天気については、気象学者のローレンツなんかは、ちょっとしたことが次に影響を与えるということで、基本的には予測不可能だということを述べているわけですが、自然科学的な発想と社会科学的な発想は世界が広がっていくことによって似てきた、というようなことが言えると考えています。

## 5. 現代社会の特徴

そういったことを基本において、現代社会はどんな時代になってきたのか、僕が思うところを項目(＝太字)に挙げてみました。これに関しては、他にもあればご意見をいただきたいと

思います。

まず、「**不確実な社会**」ということです。昔は、結果が決まったこと、こうしなければいけない、ということがいろいろありました。要するに、選択の自由度が少なかったわけです。現在では、選択の自由度が広くなればなるほど、いったい結果がどうなるか、自分がどういうふうに行動をとったらいいかわからなくなってきた。いきなり罰せられたり、宗教的に捕まったりするかもしれない。要するに、不確実な社会になったということです。

そして、「**従来の科学の正当性が脅かされる**」ということです。自然科学の世界でもそうで、例えば線形数学です。従来の自然科学的な発想で言えば、例えば、運動負荷が上がれば酸素摂取量ではこのようなデータがとれる、ということになり、そして典型的な考え方としては、すべてのデータにもっとも近い線を引いて、負荷が上がれば酸素摂取量が上がるという話をするわけです。ところが、その時に大きく外れた点は無視される可能性があるわけです。それでもOKとされていたのが線形の科学なのです。ところが、非線形的な考え方から言えば、それは間違っているということです。そういった話からカオスの話とか複雑系の話が出てきたわけです。つまり、現代社会では、従来言われてきた科学の正当性が脅かされ始めてきたのです。

それで、話がどんどん飛んでしまっていますが、「**情報による社会共通のイメージの確認**」ということです。新聞や雑誌やテレビなどがなければ、東京に住んでいる私と豊田に住んでいる木村さんとは、まったく同じ共通のイメージを持つことはないかもしれませんね。卑近な例で言えば、「だっちゅーの」というポーズは、みんな知っているわけです。僕も知ってるし、豊田に住んでいる皆さんもわかる。要するに、メディアの発達によって、距離を超えて共通のイメージをつくってしまう時代なのです。

それと同じようなことですが、そうなるにつれて、今まで秩序的につくられていた価値の正当性すら崩壊しつつあるということで、「**価値の正当性がなくなる**」のです。権威ある人が「こ

れは価値がある」と言っていたことが、実はよく調べてみたら、そんなことはない、ということが起こり始めました。そうすると、いくら昔の人が「これは価値がある」と言っても、誰も信用しなくなるし、それが価値あることだとは思わない人がたくさん出てきます。

そして、「リアリティーの喪失」ということです。実際に体を動かしてどうこうというよりも、バーチャルな世界が大きくなってきた。僕もサッカー協会にいた時、日本にバーチャル・スタジアムをつくることを提案しました。大型映像装置をスタジアムにつくり、実際にはプレーをしていなくても、その大型映像装置の3D映像でプレーが見れるというわけです。そうすると、他の会場に行かなくてもいい。そして、あたかもサッカーを見ているかのごとく、それがサッカーなのだと思うぐらい3Dの技術が発達してくる、と言われていました。実際、研究によると、視角が180度以上の大型画面をつくり、そこに人間が立つと、映像が揺れると自分の体も揺れてしまうそうです。実際は揺れてなくても、映像が揺らされることによって自分の体も揺れる。もう何がリアリティかわからない。要するに、機械的なリアリティを作り得る時代になったのです。

そして、前述のように、価値の正当性がなくなるのと同じ意味で、「権威の喪失」ということです。従来は一定の価値というものがあつた、例えば宗教とか法律がそうだと思いますが、ある価値の下に動いていれば、ある秩序だった生活ができたわけです。その権威とか価値が壊れてしまうわけです。いったい何を信じて生活したらいいのか、わからなくなってしまう。僕の飛躍的な考えかもしれませんが、オウム現象も、教祖の麻原さんの言うことが一種の価値みたいなものになり、サティアンのなかでは非常に安定した生活が送れるのかもしれない。無秩序になればなるほど、安定したところを求めていくものです。つまり、「一定の価値と結びついた構造によって秩序が安定する」ということです。それで、スポーツというのは、前述のように予測不可能、要するに将来がわからない非常に不

安な状態なわけです。その状態を、結果がわかるようにみんな努力するわけですよ。トレーニングしたり、相手のサインを盗んだりするわけです。そうすると、実は結果がわかるから安定するわけですが、そういった努力を人間はするようですよ。では、実際に無秩序な状態におくと、人間は安定するように動くかということ、僕も論文は読んでいませんが、僕の直観では、スポーツという状況におくと非常に不安定なため、人はそれを安定化しようと努力すると思います。つまり、自分が勝つ可能性を高めるためにトレーニングするのは、実は秩序の安定化を図るためである、と考えられます。

また、「自己責任」の時代ということですよ。価値や権威がなくなれば、最後の責任は自分にあるわけですね。「権威のある人に従って僕もやりました」、ということが通用しなくなる。そして、グローバル化が進めば進むほど、「国際基準(ISO)」が入ってきます。日本の基準を採用すると、世界の人から叱られてしまいます。というのは、もう誰が基準になるのかわからない時代だから、国際的に一つの基準を定めないと、何の行動もできない状況になってきたということです。だから、グローバル化が進めば進むほど、「市場の国際化」が進みます。

そして、「年功序列主義の崩壊」ということです。これは、権威の喪失や、価値の正当性がなくなることに近いと思います。

そして、情報化が進めば進むほど、「商標・肖像・著作権ビジネス」といった、架空のものが商売の取引になるということです。例えば、マーク、名古屋グランパスのキャラクター人形、グランパス・エイトという名前、選手の写真。ビデオに撮ったものをコピーするかしらないか。つまり、昔は考えられなかったビジネスが増えてきました。例えば、最近新聞に載っていましたが、バレエの世界で、ある人がある踊りをしたところ、その踊り方が、誰かがつくった踊りと同じだということで訴えられたそうです。ということは、人間の動作というものは、誰かが決めた動作で、その人が「俺の考えた動作だ」と言う、実はそれが商標となり、他の人は使え

なくなってしまうということです。もっと言うてしまうと、「ウォーキングというものはこうするのだ」と決めて僕がその特許を取得すると、そのウォーキングをやった人は僕の特許を侵したことになる可能性があるわけです。人間の身体活動までそういった権利が及び始めると、非常に複雑な世界になってくる。また、「呼吸の仕方はこうだ」と複式呼吸の特許にしたら、それを使ってビジネスをやる人は何%返せ、ということになるわけです。まあ、これは直感で、ウォーキングや呼吸において、こんなことが当てはまるとは思いません。しかし、前述のバレエの例を考えると、そういうこともあり得るわけです。

肖像権に関しても、選手が「自分の写真や映像を使うな」とサッカーなんかではよく言います。それで、陸上の選手が、ベン・ジョンソンでも誰でもいいんですが、「僕の映像を使うならば、使用料を払ってほしい。払わないならば、映像は使わないでください」と主張すると、いまのデジタル技術なんて、走っている人を消すことぐらいいくらでもできますから、8コースのうち3コースだけデジタル画像をはめこんだりするわけです。架空になるわけですね。3コースだけ選手がいないレースができる。要するに、「〇〇選手にお金が払えなかったので3コースは映せません」という状況になり得るのです。まあ大会の仕組みで絶対そういうことはさせないでしょうが、現在のデジタル加工の技術さえあれば可能だと思います。

また、サッカーとか野球では実際にあった話ですが、僕らが見ているサッカー場の映像、あれは本当の映像だと思って見ているわけですが、実は違う時があります。例えば看板の社名など、実はデジタル化によって変えることができます。スタジアムで見物していると、実際には看板の社名は「カシオ」となっている、テレビの放映でセイコーのCMが入ると、看板もデジタル加工で「セイコー」になってしまうことがあるのです。そういったことは、ヨーロッパでもビジネス化されており、それを売り込んでくる会社もあるそうです。日本でも、東京ドー

ムでの巨人戦のバックネット裏はいつもメリルリンチならばメリルリンチと入る箇所があるんですが、そこを塗り替えて実験したことがあります。そのことは新聞ではほんの少ししか扱われなかったのですが、実はこれはものすごく大変なことだと僕は思います。そういった状況が、現在の科学技術の発展という状況からは生み出されているのです。

そんな時代だからこそ、佐伯啓思さんという方もその著書のなかで、「存在することは表現され主張され記号化されること」と書いておられます。それで、「構造なき社会」ということですが、要するに価値とか秩序とかがすでに決まっていたり構造がどうなるかわかっている社会でなくて、「構造なき社会」は、実はこのような形で“構造”を擬装せざるを得ない”のです。それで「消費者は“差異化”という自己主張、つまりそれなりの“自己主題化”によって消費のシンボリックな意味を擬装化せざるを得ない」。つまり、自分自身を表現して、主張して、ある消費パターンにはめこまれないと、自分の存在すらわからなくなってしまうわけです。これも大げさな話かもしれませんが、そういう時代になってきたわけです。僕も共感したので、抜粋してきたわけですが、現代はそういう状況になりつつあるということです。

## 6. ゆさぶられるスポーツ

そういう状況において、かつ人は動いて集まって、スポーツという行動をとるわけです。だから当然、スポーツというのも昔とは違うかたちを呈しているはずで。科学技術の発達とか取引の拡大について一つの例を挙げると、車も飛行機もなければ、おそらく豊田と名古屋の間でさえ試合はしないかもしれないということです。行って、試合をして、帰ってこれないかもしれませんからね。飛行機があれば、朝のうちに飛行機でソウルに着き、ソウルでサッカーの試合をして、夕方には日本へ帰ってこれるわけです。そうなってくると、昔のスポーツとは



まったく変わってくるということです。

また、市場が国際化しているのは当然です。ある数人の人が共通して価値を認めた貝殻、昔は貝殻などの交換をしていたわけですね。でも別の人たちから見れば、貝殻に何の意味があるのかわからない。そして、米や貨幣が貝殻に取って代ってきたわけです。昔は貨幣は金（きん）と交換できたから貨幣としての価値があったんですが、いまは金ともつながっていませんね。そうすると、ある総合的なバランスでしか成り立っていないのが金融市場です。そうになって、スポーツの世界も海外のお金が入り始めると変わります。現在イギリスのサッカーを見ていただくとわかりますが、株式を上場して誰もがお金を入れられるようになると、今まで数人の人たちがやっていたクラブが、一気に大勢の人たちが株を買ったりする売買ゲームになってくるわけです。そうすると、当然収入も支出も変化するし、活動自体が変わらざるを得ない。金融市場がグローバル化すれば当然、スポーツの世界ではスポーツクラブなんてものは大きく変わってしまうのが現実です。スポーツというものが固定化しているからこそ、「ゆさぶられる」なんて表現になってしまうのかもしれませんが。変容している、ということです。

## 7. 日本のスポーツ・学校体育のゆらぎ

同じようなことは、日本の学校の体育でも言えます。日本の現状としては、まず子供がいなくなってしまうわけです。僕が生まれた頃は、同学年が約180万人いましたが、現在はその頃の2/3の約120万人です。子供が3人から2人に減ったことが、非常に大きい影響を及ぼすわけです。また、学校も土日が休みとなると、これまで考えてきたスポーツという行動を変えないと、スポーツができなくなってきます。それが日本の現状だと思います。

それで、民間のスポーツクラブで、スイミング、体操、サッカーをやるとか、文部省が最近言っている地域総合型クラブとしての半田市成岩中学の例、それから学校の部活動を改革して

民間のクラブと学校のクラブとOBによるDUOリーグをつくりリーグ戦なんかを行なう、ということが出始めました。

現在僕の研究の一つとして、ジュニアの育成ということで、子供たちがどうやってスポーツを身につけて大きくなっていくかを調べています。ジュニア育成の方法は、昔は当然学校で行いました。いまは全然変わってきており、学校ではそういうことをしなくなってきたかもしれない。それでは、学校の体育では何をやっているか。昔とは役割が違うはずですが。そういったことが、どんどん変わりつつあるのが現状です。それで何が答えかと聞かれても、僕自身もまだ答えるのは難しいのが現状です。

## 8. スポーツマネジメント

最後になりますが、「スポーツマネジメント」についてお話しします。現在、「社会学とスポーツマネジメント」というようなことに取り組んでいます。社会学的な立場で考えた時、今まで考えてきたスポーツというのは「様々に変容し得る、よくわからない、ある人の行動の状態なんだ」ということを言ってるわけです。しかし、スポーツマネジメントという、多少仕事柄考えなければいけない状況に落としこめられると、「スポーツというのはある一定のものがある」と考えないと、仕事がなかなかできなくなってきます。まず、スポーツをする人とは誰なのか。プレイヤー、そして関係者としてマネジャー、チームスタッフ、審判、観客等々。スポーツに関わるステークホルダーは誰か、それを一つひとつ探る作業をしています。それで、スポーツという行動のシステムのなかで、すべての人は動いているわけです。そのシステムのなかで、実はみんな自分の行動を予測して、なるべく予測したとおりになるように行動しているわけですが、その行動がシステム自体に影響を与えているわけです。だから、スポーツのシステムというのは、実は外部の人にはまったく影響のない隔絶された世界をつくるのは難しく、開放系のシステムだと考えられます。相撲の世界も非

常にクローズな世界をつくっているように見えますが、やはり外部のお金の問題とかが影響することはあるのです。経済不況になればタニマチの懐がきびしくなり、相撲にも影響が及ぶ可能性があるということです。だから、すべての人がスポーツマネジメントをしているわけで、すべての人がシステムのなかに存在しているという自覚を持たなければいけない。それがスポーツマネジメントの原点だと思います。

それで、スポーツを考える時に重要だと思うのは、まず情報ですね。体でたとえると、神経の電気刺激だと考えています。それから、資金、お金の流れですね。これは人間の体でいうなら血液循環ということです。それで、多くのステークホルダーは、感覚受容器ということです。みんな自分で感覚を受け取って、反応する行動をとるわけです。例えば、情報が極端に少なくなれば、筋肉も細くなるのと同じで、組織もどんどん硬直化していくわけです。首をしめられて血液が回らなくなれば、その組織は死んでいく。要するに、資金が回らないと、それに伴って人も動けなくなるので組織が死んでいくのです。だから、情報と資金は非常に重要なものと考えて、スポーツマネジメントの仕事をしていかななくてはなりません。

情報に関して言えば、インターネットや衛星放送も含めたマルチメディアというような、ニューメディアとして出てきたメディアがどんどん情報の発信、受信をしています。ということは、従来の大きな太い神経に電気を流す以外に、細い神経が実は育ってきているということです。そういう時代にスポーツマネジメントをする時、新聞やテレビを押さえればいいと思っていますと大間違いだということが時々あります。僕は、3年間サッカー協会にいた時は、インターネットのメール担当をしていました。新聞とか雑誌とかテレビは、意外ときちんと取材ルールを守ります。記者会見をするとか、事前に申込みがあって情報を提供する。要するに、太い神経で情報が流れているので、協会は押さえようと思えば押さえられるわけです。例えばある雑誌が「来週、これこれの記事を出す」と

なると、それが出る前に広告代理店からゲラ刷りが協会に送られてくるわけです。そうすると、その時点で対応する文章を考えたりできるわけです。それで、一番怖いと思ったのは、実はインターネットの回覧板です。ここは押さえられないし、内部の関係者なんかが本当のことを書くことが時々あるんです。そういった状況になってくると、太い神経を押さえるだけではどうしようもないわけです。だから、スポーツマネジメントは難しい状況になってきていると思います。

次に、資金の問題です。いまスポーツに流れる血がどんどん少なくなっています。酸欠状態です。企業も酸欠状態でスポーツから撤退しています。いろいろなところからお金が流れなくなってきました。僕がいま注目しているのは、例えば公益法人からの資金です。例えば、最近雑誌で叩かれているように、宝くじの収益金は自治省の公益法人に流れています。それで、そこが地方振興にお金を使いたいという情報でも入れば、そこにスポーツ関係の企画をもっていく。そうすると、お金がドサッと下りたりするわけですね。だから、誰がお金を持っているかを知ることが重要なことです。また、2000年度に考えられている企業連結納税制度。連結納税ということになれば、スポーツクラブの赤字は、その親企業が連結して相殺するということで、親企業が実は儲かる可能性があるわけです。そうすると、多少の赤字のスポーツクラブでも子会社として持とうという気持ちになるかもしれない。例えばトヨタがグランパスエイトを子会社として持つというようになるかもしれない。また、スポーツ振興投票（サッカーくじ）というのが2001年度からですね。文部省の試算によれば、年間1600億～2200億円のくじが買われて、その約12%がスポーツ振興、同じく約12%が地方自治体に流れると言ってます。そうすると年間160億円とかがスポーツ関係に流れるわけです。そのお金がどのように流れるのか、いまから手をつけておくと、お金がどこに流れるかわかる。僕がサッカー協会にいた時には、「早く2000年のプランをつくろう」とい

うのがみんなの合い言葉でした。お金を貰うため、資金繰りのためには、当然何かプランが必要です。「こういうことをしますからお金をください」という話ができるわけです。スポーツ振興投票のために、お金を貰おうとしている協会は非常に少ないです。いろいろな協会に話を聞いても、2000年以降、21世紀のスポーツ計画にいくらかかるか、こうしたらこういうプロジェクトが立ち上がって何人の人間が必要か、といった試算をしているところが非常に少ない。僕が手伝った仕事では、日本オリンピック委員会がそういうことに取り組んでいました。そういったところは、すでにそういうお金が流れることを予想して活動しています。だから、どこに血が溜まっていて、動脈をどう作るかということが、スポーツマネジメントにおいては非常に重要だと思います。

## 9. スポーツ市場の特徴

それで、スポーツマネジメントをする上で非常に注意をしなければいけないのは、スポーツ市場の特徴というものがあることです。それは、「ひとり勝ち市場」ということです。これについては、ロバート・H・フランク、フィリップ・J・クックの『 Weiner・テイク・オール』という著書のなかで非常に詳しく書かれており、僕の言っていることは、そのままその本を元にして考えたものです。それは次のようなことです。

### ●クローンの生産

スポーツ市場というのは非常に特徴があり、まず「クローン生産」ということです。「“ひとり勝ち”市場の究極の源泉は、最高の演技者のサービスが安い追加費用で再生産される」。

「テレビカメラを準備すれば、テニスの試合を放送するのに、世界ランキング1位対2位の試合であろうが、101位対102位の試合であろうがコストはかわらない。ランクの低いタレントの市場における居場所は狭くなる」。要するに、強い人間こそが市場に勝ち残り、弱い人間は排除されるということです。そういった特徴を現

代社会は持っているからこそ、スポーツにおいても強くなければ意味がないということです。テニスの世界ランキングで、1位、2位、3位までは名前を知っていても、10位になると誰かわからない時代です。だから、ある一部の強い人間にこそ、すべてが集まるのです。

### ●ネットワーク経済

「ネットワーク経済」というのは、「観るスポーツおよびその他の消費者が相互に影響し合う多くの活動。競争の初期段階におけるわずかな差が決定的な差になることがある」ということです。例えば、ニュー・スポーツというものをつくろうと考えた時に、一番最初に見た人の数が多かった、少なかった、あるいはテレビに映った、映らなかったという、ほんのわずかな差が数年後には全然違う段階になっているということです。ネットワーク経済だからこそ、スポーツもそういう状況にあるということです。

### ●学習や投資による固定化（ロックイン）

「学習や投資による固定化」というのは、「初期の投資パターンの差が大きな最終結果を生む」ということです。例えば、投資パターンがサッカー場に偏っていると、数年後に野球場がなくなってしまうこともあり得るということです。スポーツ施設なんてある程度恒久的な年数が必要ですから、初期投資においてサッカーへの投資の割合が少し大きいと、その最初の差が固定化した差を生むことがあります。学習においてもそうです。文部省の学習指導要領にそのスポーツが取り入れられているかいないかの差が、そのスポーツを行う人口の差になる可能性があるのです。

### ●その他の自己強化プロセス

「その他の自己強化プロセス」というのは、「初期の質を改善すれば、優秀な学生や教員を引きつけやすくなる、そのことがいっそうの名声改善につながる」ということで、この本のなかでは、新しい大学が二つできた場合に、初期の条件として優秀な教官や学生がいたかどうかという差が大きな差になる、とあります。これも、野球クラブ、Jリーグをつくる時には、「用意ドン」で一緒にスタートしたはずですが、

初期の選手や監督の質で勝ち負けが出た。そのことが最終的な名声の差につながってしまうわけです。要するに、強ければ強いほどうまく回っていく、そういう特徴があります。

#### ●処理可能範囲の限界

「処理可能範囲の限界」ということがあります。これは、「買い手の認知力の限界によって生じる」ということです。サッカー、野球、バスケット、バレー、プロレス、水泳、新体操などがテレビにドーンと出ています。しかし、消費者も3つくらいまではスポーツもわかるけれど、時間もお金もないとなると、消費者の認知力の限界を超えてしまって、それ以上のスポーツは新しい市場に入れないということがあり得ます。やはりスポーツは時間とお金と空間、場所が必要ですから、これから考えていく上では、例えば空間のない日本では、大きな運動施設を使うスポーツは参入しづらいですね。限界を超えているところに入り込むのは難しい。

#### ●習慣形成、または後天的嗜好

人間の特徴として「習慣形成、または後天的嗜好」ということがあります。「ブランド忠誠心」ということです。これは商品の場合と同じだと思いますが、サッカーが好きならばずっとサッカーを続ける、ということがあり得ます。

#### ●地位への純粋な関心

「地位への純粋な関心」というのは、「多くの商品を絶対的な特性だけではなく、それが他人が消費している商品と比べてどの程度のものかによって価値を決める」ということです。例えばゴルフとか乗馬という上流階級の人がやるようなスポーツをする人は、実は絶対に乗馬が楽しいかどうかで判断するのではなくて、上流階級の人たちがやっているからやる、というところに価値をみるわけです。例えば、新しいニュー・スポーツを名古屋駅周辺の浮浪者が始めたとしても、みんながそのスポーツに参加するかというと、非常に難しい問題がありますね。次に参加する人というのは、スポーツの純粋な価値よりも、まず「浮浪者がやっている」という価値が入ってしまうということです。

#### ●後悔の回避

「後悔の回避」というのは、「最良でないものを買ったことから起こり得るマイナスの効果を後悔したくない」ということです。マイナーなスポーツ、例えば学校に剣玉クラブというマイナーなクラブがあって、自分は好きで入りたいけれど、入部することによって後悔することもありうるということです。そういう意味では、スポーツを選択する時に、みんながやるからやる、というのはこういうことですね。みんながやっているからそこに入ってしまう。

#### ●購買力の集中

「購買力の集中」というのは、「ひとにぎりの資産を動かすことのできる人間が、自分たちの関心を持っている結果を得るために大量の資源を投入することができる」ということです。先ほどお話したように、お金の動きに注目すると、実は大きな資金を動かせるのは数人なわけです。その人たちが「俺はサッカーが好きだ」となった時が怖いわけです。ポケットマネーでやっている人たちを数人集めたとしても、やはりほんのひとにぎりの100億動かせる人間が「サッカーだ」と言った時の方が影響は大きい。だから、ひとにぎりの資産を動かせる人間が実は、結果の影響力において非常に大きい、というようなことがあります。

スポーツマネジメントをやりながら、いまこういう市場があって、スポーツの特徴はこういうものなんだと、僕自身考えながらやってきました。こういったことを、本を読んで、ああそうかと理解したわけですが、実際にサッカー協会で働いている時は毎日あくせく夜12時頃までワープロ打ちとかさせられていたわけです。サッカー協会で働いていただけではここまで考えられない、というのが現状でした。2002年のワールドカップの仕事に携わっていたわけですが、それをやめて名古屋大学の助手になることについては、「もったいないじゃないか」と周囲からは言われました。確かにサッカーの好きな人から見れば、2002年の仕事というのはやりたくて仕方がないことかもしれません。しかし自分にとっては、それをもう一度

外から見てみたいという気持ちがあった。そういう意味で、一度外へ出られるチャンスがあるなら出てみよう、と思ったわけです。そして、現在に至ってます。

そういうことで、お話をさせていただきました

た。いろいろとご意見があると思います。どんどんディスカッションしていただいて、相互交流して、僕も成長したいと思いますので、よろしくお願いします。